

## 宮本久雄先生の教父学

出村 和彦

私が宮本先生に初めて出会ったのは、一九八〇年代半ば、上智大学中世思想研究所編の『中世思想原典集成』『盛期ギリシア教父』の巻の企画を通じてである。ちょうど先生は、東大駒場の一番若い教員として風のようにやって来た。ドミニコ会士としてカナダやパリでトマスを熟読し、聖地エルサレムで旧約聖書を研究しておられた（という風聞でしか知らない）私たちには、大学教授、聖書学者、教父学者、中世哲学者、ドミニコ会修道士でカトリック教会の司祭というような枠に収まることのないすうーっと突き抜けた感じの先生の折に触れたコメントに、何とも新鮮な思いをしたのであった。

初期の著作に宮本教父学の原点とも言える記述がある。少々長くなるが引用したい。

教父は、この根源的な存在・ロゴスに出会ったのである。しかも教父はギリシア哲学の衣鉢をついだ人びとであった。ギリシア哲学の智慧はすでに宇宙世界と人間の原理・原因をこの同じ「ロゴス」という言葉で表現していたのである。その場合、ロゴスは宇宙自然の理法であり、人間を人間たらしめる理性・言語であった。だから教父は、彼らの出会った「元始根源のロゴス」において、ギリシアの人びとや他の民族が理性によって見出した諸々の知恵の収斂点すなわち普遍的真理に出会ったわけである。われわれは、以上のような教父が、他のすべての人びとと語りあえ生きうるような根源的な「存在」の次元に出会ったそのすがたに感動するのである。今日われわれは、日本の地でやはり人間が共に語り生きうるような思索と生き方の場を探究している。だからわれわれがここで教父を学ぶことは、彼らが思索し生きた次元に接して、自らもまたロゴスの開示する真理のふところに生きようと願うからである。そのとき、教父が歴史的キリスト教とその哲学・神学の成立に果たした、文化的思想的役割を考察することは、何か

そのものとしては第二義的なことになると思われる。

〔教父と愛智（改訂増補版）〕新世社、一九九〇年八月

『原典集成』編集の他に、東方キリスト教会会の同人ら合宿を重ねて成立したニュツサのグレゴリオスの『雅歌講話』の翻訳や『フィロカリヤ』全巻翻訳の推進はそのような教父の思索と生き方の分かち合いの協働態の土台を形成する営みであった。それはギリシア古典哲学の研究から教父研究には入った私たちにはなじみやすい切り口であった。そうする中、教父研究会の会長をお引き受けになった広島での総会（二〇〇七年一月九日中世哲学学会大会前夜）の後、『告白録』のキアスムス構成にはアウグステイヌスにしみこみ彼の身体のリズムそのものに受肉しているヘブライズムという背景があるのだと、手書きの図表を取り出して一気にお話になったのを懐かしく思い出す。以来、二〇一三年一月の共生学研究会との共同シンポジウムまで、狭い意味で教父研究者に限らない提題者が集結する場に研究会を展開してくださったのである。

教父研究とは何をするのか。宮本先生は、何か既成の学問 (Patristic studies) の枠にとどまろうとする私たちを突

き放す。常に「なぜ今ヘブライ・教父・中世なのか」を問い、ついに「存在―神論の歴史とその諸帰結を検討してみた結果、神の死を通り越していれば存在の死を垣間見た」と告げる（『他者の原トボス―存在と他者をめぐるヘブライ・教父・中世の思索から―』（二〇〇〇年）三〇―三二頁）。「存在神論を通して問題にしてきたのは、存在するものに対して人間の態度であり関わり方だったのである」として、「ニュツサのグレゴリオスに存在神論の突破の手がかりを求め」（九二頁）。その際、『雅歌講話』の物語の筋立て (Intrigue) 筋・策略・陰謀を分析することでそれを遂行する。『愛の言語の誕生―ニュツサのグレゴリオスの『雅歌講話』を手がかりに―』（二〇〇四年）では、『雅歌講話』の全体を参究し、また『雅歌』の受容史や、『雅歌講話』における「物語的自己同一性」とハヤトロギアを論じている。それらは、「ハヤトロギアの視点で、雅歌的なエペクタシス、プネウマ的解釈、ウーシアとエネルギーアの差異などが撰取止揚され、現代における死と擬似的な生の間・空を漂白しつつ、越境しつつ新たな生き方と協働態を展望する最初の半歩」（三〇八頁）を踏みだして、方法論としての物語論を教父学・教父哲学研究へ導入した画期的

なものと見えよう。

しかしそこに留まることなく、ハヤトロギアからさらにエヒエイロギアへと思索を進められる。興味深いのは、「このエヒエイロギアの発想の機縁となったのは学生時代に触れた教父学の泰斗有賀鐵太郎氏の書『キリスト教思想における存在論の問題』とその核心ハヤトロギアであった。その後イスラエル遊学中に歩んだシナイやヨルダンの荒野の旅から、ヘアライ的脱自（ハーヤー、エヒイエ）をこの身をもって体験した。そしてそのエヒイエの思想的体験によつて現代の荒野をよぎりうればよしと願うようになった」（『他者の魅り』二〇〇八年、二三六頁）と言われていることである。そこから、ラテン西方の伝統だけでは見えてこないパウロやアウグスティヌスの身体性についての貴重な洞察が得られるのである。こうして最近では「古代・中世の思想や知恵が、プロメテウスの火（ヒュプリスの象徴であり具体化）の只中で、どのように人間の絆・協働態の地平を披くのかという問題意識と思索が本書の基本線」である『出会いの他者性——プロメテウスの火（暴力）から愛智の炎へ——』（二〇一四年、三二九頁）を私たちに突きつける。

宮本先生は、辛苦を厭わず、お忙しいときも研究会を主催し、合宿に参加し、共飲会につきあつてくださる。（身をもって）パルーシアされる。しかも、例会のなじみとかお付き合いといった習慣の重さを突き抜けてやつて来られる。確かに〈風来〉というのがふさわしい。してみれば、時を忘れてワインのボトルが空けられていくのもまさに時宜にかなつたことである。

足跡をたどるというのは時期尚早なのかも知れない。疾風とも言うべき多彩な展開で、あれよあれよという間に私たちは遙か後方で茫然と佇むことも少なくない。しかし私たちは、先生が身をもつて示してくださつた〈風〉の根源に向かつて、もっと自由に、それゆえもっと真剣に身を披いて、改めて教父と取り組めばよいのではないか。それが真理のふところに生き従つていく（アコルーティン）の同じ途を行くことではないだろうか。